

## 一人称の科学としての心身論

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
西山 智彦

本論文のねらいは「一人称の科学としての心身論」題して、日常の身近な生活の中でのひとりひとりの気づきによって豊かに彩られていくような心身論の展開の可能性を提示し、しかもそれによって既存の科学モデルや哲学と共に対話していける方法論的基盤をつくることにある。

本論文の概要は次のようなものである。序論、第一章では、日本社会の変化とその社会における心身観を概観する。その上で、心身観の現状が、容易に理解可能なものとしての情報化した心身観を求めるものとなり、本当の意味での自分自身の心身についての豊かな理解を求めると言うようなものではなくなっていることを指摘する。そして情報化した心身観を求める背景には、デカルト哲学における心身二元論的思考様式による心身理解の誤用があることを示唆し、そのようなデカルト哲学的な思考様式とは別の方法から心身についてアプローチしていくことによって、豊かな心身理解を促すような心身論のあり方の必要性を提唱する。

第二章では、トーマス・ハナの名づけた「ソマ」=「生きることとしての身体」に注目し、それに対する研究方法の可能性として、ジェンドリンらの提唱する「一人称の科学」をとりあげる。そして、一人称の科学における諸問題を明らかにするとともに、フッサールの提言した超越論的現象学の着想をもとに、一人称の科学における一人称性の範疇と、一人称の視点からの記述ということに対して考察し、一人称の科学における研究方法の基本的な方向性を提示する。

第三章では、一人称的科学の方法論を用いて、実践的に心身論を展開する。第一節では、われわれの存在には、「思惟する我」以前の「未然形的な私」というような心身の状態があるのではないかということについて論じ、第二節では、社会に対して開かれた存在である「已然形的な私」ということに言及し、一人称的な心身の矛盾葛藤経験と社会的な私性を維持するための「已然形的な私」としての経験の差異が、情報化した身体観の受容を希求する原因になっていることを指摘する。

結論では、第三章での実践的な心身論の展開から見えてきた一人称の科学的研究における諸課題を提示するとともに、一人称の科学としての心身論の展望を述べて本論文のむすびとする。